The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「大阪方言の命令形」に後接する終助詞ヤ・ナ
Author(s)	牧野, 由紀子
Citation	阪大日本語研究. 2009, 21, p. 79-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4642
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』21（2009）

「大阪方言の命令形」に後接する終助詞ヤ・ナ

Final particles ‘*ya*’ and ‘*na*’ connected to imperative form in Osaka dialect

牧野　由紀子
MAKINO Yukiko

キーワード：終助詞ヤ、終助詞ナ、命令形、大阪方言、対人配慮

要旨

本稿では大阪方言の「命令形」に後接する終助詞ヤとナの基本的な意味について分析をおこない、そのヤとナが実際の運用においては対人配慮の操作に関与していることを考察した。その結果、次の点を明らかにした。（ⅰ）ゼロ形式の基本的な意味は「命令」をそのまま伝えるものである。（ⅱ）ヤの基本的な意味は、聞き手の意向を顧慮せず、話し手の意向（命令）を一方的に聞き手に流し込む態度を表わすものである。（ⅲ）ナの基本的な意味は、話し手の意向に対して聞き手に一致・同意を求める態度を表わすものである。（ⅳ）実際の運用場面では、それぞれの基本的意味から、ヤは発話を《命令》寄りに、ナは《依頼》や《勧め》寄りに、発話機能の微調整をおこなうという談話的な機能をもつ。（ⅴ）ナが使用されるとネガティブポライトネスストラテジーとして相手への配慮が表現され、《聞き手利益命令》でヤが使用されると丁寧さの原理やポジティブポライトネスストラテジーとして相手への配慮が表現される。このように社会的関係や状況によってゼロ形式・ヤ・ナが使い分けられ、聞き手への配慮を示しながら命令の達成が図られている。

１．はじめに

大阪方言では、命令形「セイ」は基本的に男性の専用形であり、男性でも子どもや親しい男友達にぞんざいに命令する以外には、通常はほとんど使用しない。これに代わって連用形命令「シ」があり、日常的な行為指示場面で男女ともに使用される。また、本来、命令形ではない「シテ」という形式が実質的には命令として多用されている。これらの３形式を本稿では便宜上、「大阪方言の命令形」と呼ぶことにする（2. 2. で詳述）。これらの３形式には、しばしば終助詞「ヤ」「ナ」が後接する。ヤはこれら３形式にしか後接しない。ナは命令形命令セイには後接しないが、連用形命令シとテ形命令シテには後接する。次のとおりである。以下、用例では終助詞部分のみカタカナで表し、終助詞を使用しない場合をゼロ形式とし、ϕで表す。非文には*、運用的に不適切な場合には#、運用的に適切性が

低い例に?をつける。

（1）（父親が子どもに）遅れるで、早よせい｛φ／ヤ／*ナ｝。
（2）（友人に）遅れるで。早よしい｛φ／ヤ／ナ｝
（3）（友人に）遅れるで。早よして｛φ／ヤ／ナ｝。

ヤとナは（2）（3）のように、連用形命令シとテ形命令シテには共に後接し、一見、ほとんど同じ意味に使われているようにみえる。しかし、ニュアンスは異なり、たとえば（4）では、ヤを用いると帰るように促す響きがあり、ナを用いると帰るよう言い聞かせるニュアンスとなる。また（5）では、ヤは命令する響きとなり、ナは頼んでいるニュアンスとなる。

（4）（子どもの友達に）もうすぐ暗くなるからそろそろ帰り｛φ／ヤ／ナ｝。
（5）（家人に）雨が降ったら洗濯物、取り入れて｛φ／ヤ／ナ｝。

しかし、以下の例のようにいずれかしか使えず、お互いに置き換えできない場合もある。

（6）（子どもに）ほら、友達きてくれたで。さっさと行き｛φ／ヤ／#ナ｝。
（7）（友人に）明日の会合、頼むから私の代わりに行って｛φ／*ヤ／ナ｝。

こうしたヤとナの用法の差異は、ヤとナの基本的な意味の差によるものであろう。本稿は、ヤとナが共に後接する連用形命令シとテ形命令シテに注目して、ヤとナの基本的意味を記述し、その使い分けの様相を明らかにすることを目的とする。

また、「命令」は聞き手に負担を強いる行為であるため聞き手への配慮が不可欠であり、ヤとナはこうした「命令」における対人配慮の操作に関与していると思われる。本稿では、ヤとナがその基本的な意味の違いにより、どのように対人配慮に関与しているか、その様相を明らかにすることも目指している。各方言には命令形に後接するさまざまな終助詞があり、これらの終助詞が命令における対人配慮の在り方を操作するものとして重要な位置を占めていると考えられるため、ポライトネス（2. 4. で詳述）の観点からも、終助詞の研究は重要な意味があると思われる。

終助詞ヤとナは関西一円で広く使用されているが、運用には微妙な差がある可能性もあり、本稿では一応、大阪市周辺に絞って考察する（2. 2. で詳述）。また、世代的にも中年層の女性の運用を中心に分析することにする。

以下、2節で先行研究、3節で分析の前提と調査方法について述べる。4節でヤとナの共起関係について整理したのち、5節でゼロ形式・ヤ・ナの基本的な意味について記述する。

6節でその具体的な運用について分析し、7節でまとめる。

2．先行研究

2. 1. で命令形に後接する終助詞、2. 2. で大阪方言の命令形、2. 3. で命令形のイントネーション、2. 4. でポライトネス理論についてそれぞれその先行研究と本稿の立場を述べる。

2. 1. 命令形に後接する終助詞

井上（2006）は方言終助詞を記述することの重要性を指摘し、その目標は、①終助詞の意味記述に役立つ分析的概念を抽出すること、②当該方言を母語としない人にもわかる説明をおこなうこと、と述べている。そして、「終助詞の意味記述において重要なのは、終助詞が表す基本的な心的態度と、具体的な場面で終助詞を使用する際の話し手の気持ちとを区別し、かつ後者を前者と結びつけて説明することである」と述べている（2006;139-140）。

このような観点から命令形に後接する終助詞を分析した先行研究として、井上（1995、2006）、渋谷（2003）がある。井上（2006）によると、富山県井波方言の命令形に後接する終助詞にはヤ、マ、カがあり、共通語では「行為指示＋ヨ（上昇）」は念押し的な指示、「行為指示＋ヨ（非上昇）」は状況修正指示というように文末のイントネーションによって意味が変わるのに対して、井波方言では、ヤが念押し的な指示、マが状況修正指示、さらにカが許容･放任的な指示というように終助詞で表し分けている、と指摘している。また、渋谷（2003）は山形市方言の命令形につく終助詞ナ、ネ、ヨについて、終助詞がつかないゼロ形式との比較の中で、それぞれの終助詞の意味・機能について分析している。その結果、ゼロ形式は特別な前提のない状況での中立的な命令、ナは命令内容が聞き手の意向にそぐわないという現状把握を前提とした丁寧な命令、ネは命令内容が聞き手の責任という前提のもとでの確認や念押しの命令、ヨは聞き手の実行に危惧を抱いていることを前提として実行をせまる命令と指摘している。方言命令形についての研究は多いが、命令形に後接する終助詞に焦点化した研究は今のところまだ少ないのが現状である。本稿では井上（2006）と同様の観点から大阪方言の終助詞についての記述を試みる。

2. 2. 大阪方言の命令形

郡（1997）は大阪府の方言には摂津方言（いわゆる「大阪弁」とよばれるもの）、河内方言、和泉方言があり、このうち摂津方言と河内方言（特に北・中河内方言）は非常によく似て

いるとしている。本稿では「大阪方言」として摂津方言を対象とする。

島田（1944）によると、大阪方言では、命令形として近世まで「起きよ」「せよ」が用いられており、それが現在、語末の「よ」が「い」（あるいは長音）に変化して、「起きい・起きー」「せい・せー」となったとされる。島田（1944）は、このような命令形は高圧的で待遇的に最も劣る形式としてそうした感じを起こさせる必要がある状況でのみ用いられ、そのかわり柔らかい穏やかな形式として連用形命令があり、「起き」、「掃除し」などのように日常語として気軽に命令する形式として広く用いられる、と指摘している。

また、森山（1999）は、京都方言の連用形命令にはゼロ連用形命令「シ」とテ形命令「シテ」の２つがあるとし、「この両者は京都方言におけるいわば、第２の命令形である」と述べている。この両形式の使い分けについて、ゼロ連用形命令は命令内容が当然すべきことである、という意味をもっているのに対して、テ形命令はそうではない、としている。大阪方言の場合もほぼこれに準ずると考えられる（牧野2008）。

以上に基づき、本稿で「大阪方言の命令形」と呼ぶとき、命令形命令、連用形命令、テ形命令の３形式をさすこととする[1)]。また３形式を区別する際にはこれらをサ変動詞で代表させ、命令形命令を「セイ」、連用形命令を「シ」、テ形命令を「シテ」と呼ぶこととする。ただし、本稿はヤとナの意味記述とその使い分けの様相を明らかにすることを目的とするため、ヤしか後接しないセイは分析から外し、ヤとナが共に後接するシとシテに絞って分析することにする。

2. 3. 命令形のイントネーション

井上（1993）は、共通語における命令文の機能を、（ｉ）「矛盾考慮／非矛盾考慮」、（ii）「タイミング考慮／非タイミング考慮」という視点から類型化し、（ｉ）の区別を表すのにイントネーションが関与していると指摘している。大阪方言でもこの指摘は重要であり、ここでその概要を紹介する。

「矛盾考慮」の命令文は、「話し手の意向通りに事態が進行していない、として聞き手にその修正を求める状況修正指示」であり、また、「非矛盾考慮」の命令文はそうした想定のない命令文である。矛盾考慮は共通語の場合、下降イントネーションの「ヨ↓」で表され、このとき「ネ↓」は使えない。非矛盾考慮は上昇イントネーションの「ヨ↑」あるいは「ネ↑」で表される。以下の用例は井上（1989）による。

（８）ちょっと！写真を撮るんだから、動かないで｛ヨ↓／*ネ↓｝。（矛盾考慮）

（９）はい、写真を撮るから、動かないで｛ヨ↑／ネ↑｝。（非矛盾考慮）

また、「タイミング考慮」の命令文は「発話時、動作実行のタイミングである」ことを前提に発せられる命令文のことであり、「非タイミング考慮」の命令文は、「現在、動作実行のタイミングにはない」ことを前提にして発せられる命令文のことである。

(10) 1時になりましたから、仕事を始めてください。(タイミング考慮)
(11) 1時になったら、仕事を始めてください。(非タイミング考慮)

大阪方言の場合も共通語と同様、イントネーションの違いが意味の違いに関与している。ただ、共通語では矛盾考慮でネが使用できないのに対して、大阪方言ではヤもナも使用可能である点が異なる。

(12) ちょっと！写真を撮るんやから、動かんといてー {ヤ↓／ナ↓}。(矛盾考慮)
(13) はい、写真を撮るから動かんといて {ヤ↑／ナ↑} (非矛盾考慮)

以下、「大阪方言の命令形」にヤ・ナが後接した場合のイントネーションについて本稿の立場をのべておく。

(ⅰ) 矛盾考慮型：下降イントネーション
矛盾考慮の意味をあらわす。この場合、シやシテは必ず長呼され、ヤかナが必ず後接する。終助詞の前で下がり、「起きー〔↓〕ヤ」のように表記する。
(例) 起きー〔↓〕ヤ、走りー〔↓〕ヤ、しー〔↓〕ヤ、してー〔↓〕ナ

(ⅱ) 非矛盾考慮型：非下降イントネーション
下降しないものである。アクセント型を維持したまま終助詞が順接するものを便宜上「平板調」と呼び、起きヤ〔→〕のように表記する[2)]。1拍動詞の場合は長呼される場合もある。
(例) 起きヤ〔→〕、走りヤ〔→〕、しーヤ〔→〕、してナ〔→〕。
また、これとは別に終助詞だけ高くつくタイプもあり、便宜上「上昇調」と呼び、起きヤ〔↑〕のように表記する。このタイプについてはそのつど指摘する。
(例) 食べヤ〔↑〕、走りヤ〔↑〕、しーヤ〔↑〕、してナ〔↑〕

2.4. 「命令」とポライトネス

「相手に何らかの行動をおこなうよう要求する」行為には命令、依頼、勧めなどいろいろあるが、熊取谷 (1995) はこれらを「行為指示」の「発語内行為」と位置づけ、絶対的な相違ととらえるのではなく、典型的な「命令」と典型的な「依頼」を両端にもつ連続体

を形成する関係にあるとしている。本稿でもこの観点に従う。以下、「行為指示」と呼ぶときは、命令、依頼などの総称として用いることとする。

「命令」という行為は相手を自分の意図のとおりに動かそうというものであり、相手への配慮が不可欠である。Brown and Levinson（1987）はそのポライトネス理論のなかで、「相手のフェイスを侵害する行為（フェイス侵害行為：FTA）をおこなう際には、侵害度を減らすために各種のストラテジーが採られる」としている。命令はFTAの最たるものであり、同書でも「命令」について多くの言及がみられる。ストラテジーにはネガティブポライトネスストラテジーとポジティブポライトネスストラテジーがあり、前者は「人に拘束されたくない」という相手のフェイスを尊重し、相手と距離をとることで丁寧さを達成しようとするものであり、一方、後者は「人に認められたい」という相手のフェイスを尊重し、相手に親愛の情を示し、相手との距離を縮めることで丁寧さを達成しようとするものである。命令という行為を考える際、ポライトネスの視点は重要であると思われ、本稿でも参考にする。

3．分析の前提と調査方法

命令の分析をおこなう際、注意する必要があるのは、形式と機能が必ずしも１対１の対応をしていない、という点である。命令形が必ずしも命令の機能で使われるとは限らず、逆に他の形式が命令の機能を持つ場合もある。大阪方言の場合、特に形式と機能の対応関係が複雑であるため、本稿では「文機能」と「発話機能」に分けて考えることにする。まず 3. 1. で文機能と発話機能について述べ、3. 2. で分析の前提的知識として、シとシテの文機能と発話機能をまとめたのち、3. 3. でヤとナについての調査方法を述べる。

3. 1. 文機能と発話機能

「文機能」とは、文自体における意味論的な機能のことであり以下、〈　〉で表す、また、「発話機能」とは、聞き手の存在や場面の違いを前提として初めて発動する語用論的な機能であり以下、《　》で表す。

本稿では命令形の発話機能について、姫野（1997）や柏崎（1993）を参考に、①行為の選択権の有無（その行為をするかどうかについて聞き手の選択権を認めるか否か）、②利益のありかという２つの観点から分類し、図１のとおり４つの発話機能を想定した。

この分類について、例文を交えてここで説明する。まず、《非聞き手利益命令》は話し手が聞き手に実行の選択権を想定しておらず、かつ聞き手に利益がない事柄の行為指示で

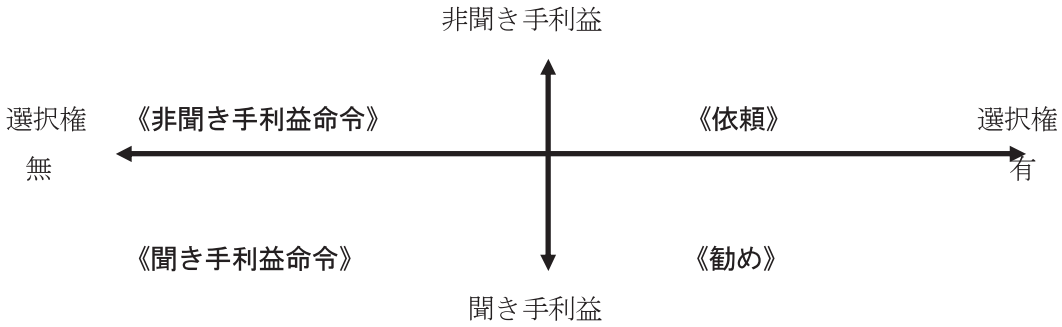

図１　命令形の《発話機能》の４類型

ある。いわゆる典型的な「命令」であり、たとえば、次のようなものである。

（14）（上司が部下に）何ぐずぐずしている。今すぐ、行け。　【非聞き手利益命令】

なお、《聞き手利益命令》の対極として《非聞き手利益命令》としたのは、命令の場合、利益のありかが常に話し手にあるとは限らず、いわば公の利益とでもいうべきものがしばしば含まれているからである。たとえば、次のようなものである。

（15）（災害現場で）あそこにけが人がいる。早く行け。　【非聞き手利益命令】

これに対し、《聞き手利益命令》は、話し手が聞き手の選択権を想定していないという点では命令だが、行為による利益が聞き手にある、というものである。

（16）（腹痛を訴える友人に）尋常じゃない。すぐ、病院に行け。　【聞き手利益命令】

行為指示において、利益のありかの違いは対人配慮の際の言語行動に大きな違いとなって現れるため、この両者をはっきり区別することにする。なお、この両者を区別する必要がない場合はその総称として《命令》とする。

一方、《依頼》と《勧め》は聞き手の選択権を認めているものであるが、このうち、《依頼》は聞き手に利益がない（多くの場合、話し手に利益がある）行為指示であり、《勧め》は聞き手に利益があるものである。

（17）明日、急用ができて行けなくなったので、私の代わりに行って。　【依頼】
（18）雨が降りそうだから、もしこの傘でもよければ持って行って。　【勧め】

以上の分類は、利益のありかと聞き手の選択権の有無という２つの分析軸から４分類したあくまで理念的な分類であり、分析の枠組みとして使用するためのものである。したが

って実際の運用場面ではこの区別は絶対的ではなく連続的である。たとえば以下のような例は《命令》か《依頼》かを分類するのは難しい。この点について6節で詳しく述べる。

（19）（友人に貸した本を）明日、必ず返して。

3. 2. シとシテの文機能と発話機能

まず、シとシテの「文機能」を考える。シは、「さっさと」などの副詞と共起する一方、「頼むから」などといった表現とは共起できず、文機能は〈命令〉といえる。一方、シテは「頼むから」とも共起し、聞き手の自由選択の意思を許容している点で、文機能は〈依頼〉といえる。したがって以下のような文は意味的に不可となる。

（20）（ショッピングで）そのシャツ、あなたによく似合うから*買って。

〈命令〉の文機能を持つシと〈依頼〉の文機能を持つシテが、実際にはどのような発話機能で用いられるかについて、整理したのが表1・表2である（牧野2008）[3)]。

表1　シ・シテの発話機能－女性－

	ウチ（家族）			ソト：親		ソト：少し疎	
	S>H	S=H	S<H	S>H	S=H	S>H	S=H
《非聞き手利益命令》	▲	▲○	○	▲○	▲○	○	○
《聞き手利益命令》	▲	▲○	▲○	▲○	▲○	▲○	▲○
《依頼》	○	○	○	○	○	○	○
《勧め》	▲	○	○	○▲	○▲	○	○

▲：シ、○：シテ　　複数形式が使える場合は併記した。
S：話し手、H：聞き手、><：開いている方が上位であることを示す、=：同等の関係にあることを示す。
ソトの疎やS<Hに対しては、社会的慣習上、命令形がそもそも使用できないため省く

表2　セイ・シ・シテの発話機能－男性－

	ウチ（家族）			ソト：親		ソト：少し疎	
	S>H	S=H	S<H	S>H	S=H	S>H	S=H
《非聞き手利益命令》	■▲	■▲○	○	■▲○	■▲○	○	○
《聞き手利益命令》	■▲	■▲○	○	■▲○	■▲○	▲○	▲○
《依頼》	○	○	○	○	○	○	○
《勧め》	▲	○	○	○▲	○▲	○	○

■：セイ、▲：シ、○：シテ　　〈文機能〉が〈命令〉のものを黒で示している。

この表から次のことが分かる。セイとシは《命令》機能で使用され、《依頼》機能で使用されることはないが、シテは《命令》《依頼》《勧め》すべての発話機能で使用される。

また、《命令》に注目すると、ウチのS＞H（典型例：我が家の子ども）にはセイやシが使われ、社会的距離が遠くなるにしたがってシテが使われ、セイ・シとシテが聞き手によっていわば相補分布的に使い分けられている。

(21)（子どもに）もう行くから、さっさとシ。
(22)（友人や後輩に）もう行くから、さっさとシテ。

(22) で「さっさと」を伴って使用されているように、シテは《依頼》で用いられるとは限らず、ウチの目下以外では《命令》でも用いられるのである。

3. 3. 調査方法

分析は以下のインフォーマントの内省による。

T：1953（昭和28）年生まれ、女性、大阪市阿倍野区在住、外住歴なし。

U：1956（昭和31）年生まれ、女性、0 ～ 12堺市、12 ～ 18大阪市、18 ～ 22東大阪市、22 ～大阪市。

調査は2007年、以下の手順でおこなった。

①《非聞き手利益命令》《聞き手利益命令》《依頼》《勧め》それぞれの発話機能について、その機能を典型的に表す例文を作成した。

②一方で インフォーマントに上下関係、ウチソト、親疎関係の観点から、人間関係のネットワークを聞いた。

③ネットワーク上の人物にその例文を使用する場合、ヤとナが使用できるか否かを聞いた。また、使用できる場合にはヤとナでどのようなニュアンスの違いがあるか、使用できない場合は使用するとどんなニュアンスが生じてしまうか、どういう状況であれば使用可能になるか、などインフォーマントの内省を詳しく聞いた。また、インフォーマント自身からもヤとナが使える例文を提示してもらい、それぞれのコンテクストやニュアンスの違いを詳しく聞いた。

4．共起関係

まず、ヤ・ナと各文タイプとの共起関係を改めて確認しておく。ヤは命令文にしか後接せず、命令文専用の終助詞である。一方、ナは命令文には後接せず、平叙文や疑問文には後接する汎用の終助詞である。

(23) 明日は必ず行け {ヤ／*ナ}。 【命令文】
(24) 明日は雨や {*ヤ／ナ}。 【平叙文】
(25) 明日、太郎は来るか {*ヤ／ナ}。 【疑問文】

ヤ・ナと大阪方言の命令形3形式との共起関係は（26）～（28）のとおりである。

(26) 明日は必ず行け {ヤ／*ナ}。 【命令形命令】
(27) 明日は必ず行き {ヤ／ナ}。 【連用形命令】
(28) 明日は必ず行って {ヤ／ナ}。 【テ形命令】
(29) 明日は必ず行かんとあかん {*ヤ／ナ}。 【平叙文】

ヤは命令形命令のほか連用形命令やテ形命令にも後接する。しかし、(29) のように意味的に命令を表す文であっても、これら3形式が用いられていなければヤは使えない。ヤはこれら3形式にのみ後接する終助詞なのである。なお、このことが「大阪方言の命令形」としてこれら3形式をまとめる根拠になっている。一方、ナは命令形命令には後接しないが、連用形命令やテ形命令には後接する。

このヤとナはお互いに共起しない。

(30) 明日は必ず行き {*ヤナ／*ナヤ}。

これらのことから、シとシテによる命令文は、終助詞がつかない場合・ヤがつく場合・ナがつく場合の3通りがあり、φ・ヤ・ナが三項対立をなすといえる。

(31) 明日は必ず行き {φ／ヤ／ナ}。 【連用形命令】
(32) 明日必ず行って {φ／ヤ／ナ}。 【テ形命令】

否定命令文（禁止文）については議論が複雑になるため本稿では分析を避け、肯定命令に限定して考察することにするが、ここで共起関係についてだけ言及しておく。

(33) あっちには行くな {φ／ヤ／*ナ} 【命令形命令】
(34) あっちには行きな {φ／ヤ／イナ} 【連用形命令】
(35) あっちには行かんとき {φ／ヤ／ナ}。 【連用形命令】
(36) あっちには行かんといて {φ／ヤ／ナ}。 【テ形命令】

否定命令でもやはり、ヤは命令形すべてに共起し、ナは命令形命令とは共起しないが、命令形命令以外とは共起する。なお、連用形命令の否定形「行きな」の「な」は共通語の「行

くな」の「な」と同様、禁止を表すものであり、本稿で扱う終助詞のナとは別のものである。

このような共起関係からみて、連用形命令とテ形命令は命令形命令とは一線を画すものであり、本来の命令形ではないことは明らかである。連用形命令は大阪方言ではすでに「命令」の意味が焼き付いているとされるが、その本質はやはり連用形であり、テ形命令も本質はテ形である。連用形命令やテ形命令は本来の命令形ではないためナの使用が可能であるが、すでに命令の意味がある程度焼き付いているためヤの使用も可能になっていると思われる。

ヤ・ナは共通語の命令形につくヨ・ネと類似しており、一見、ヤが共通語のヨ相当、ナがネ相当にもみえる[4)]。しかし、実際にはかなり様相が異なる。共通語のヨが命令形以外にも後接する汎用の終助詞であるのに対してヤは命令形以外には後接しない命令形専用の終助詞である点、またヨとネが共起するのに対してヤとナは共起できない点などである[5)]。

(37) 明日は必ず行け｛φ／ヨ／*ネ／ヨネ｝。
(38) 明日は雨だ｛φ／ヨ／ネ／ヨネ｝。

こうした違いを踏まえ、本稿では大阪方言のヤとナの記述をおこなう。

5．基本的な意味

以上の前提をもとに、本節ではヤとナの基本的な意味の分析に入る。

4節でみたように、シ・シテでは、ゼロ形式・ヤ・ナが3項対立している。5.1.でゼロ形式・ヤ・ナの基本的な意味について考察したあと、5.2.でゼロ形式と終助詞がついた形式の違い、5.3.でヤとナの違いについて具体的な用法から詳しく検討し、5.4.でまとめる。

5.1. ゼロ形式・ヤ・ナの基本的な意味

滝浦（2008：124）は、「文を命題要素とモダリティ要素に分けるなら、終助詞はモダリティ要素である。モダリティであるとは、言表内容そのものには影響しないけれども話し手がそれをどういう構えで差し出そうとしているかを表現することである」としている。本稿でも、ヤ・ナは「（文の内容を）話者が聞き手にどういうものとして差し出そうとしているか」という「伝達態度」（益岡1991）を表すものであると考える。したがって、「3項対立」としたが、より厳密にいえば、まず、ゼロ形式と終助詞がついた形式との対立があるといえる。ゼロ形式は「命令」という「はたらきかけのモダリティ」（仁田1991）をそのまま伝えるものであり、一方、終助詞は話し手の「伝達態度」を表すものである。

またヤとナそれぞれの意味については、まず共起関係から次のように考えられる。ヤとナは互いに共起できず、この点から両者は同じ意味領域において対立した意味を持つ。また、ヤが後接するのはセイ、シ、シテという命令形のみであり、聞き手の選択権を認めるような行為指示とは衝突する意味を持つ。逆にナは命令形命令と共起しないところから、聞き手の選択権を認めない行為指示と衝突する意味を持つ。このような点に基づいて、結論を先取りするなら、ゼロ形式、およびヤとナの意味をそれぞれ次にように考えることができる。

(39) ゼロ形式の意味：「命令」をそのまま伝えるものである。

(40) ヤの基本的な意味：聞き手の意向を顧慮せず、話し手の意向（命令）を一方的に聞き手に流し込む態度を表わすものである。

(41) ナの基本的な意味：話し手の意向に対して聞き手に一致・同意を求める態度を表わすものである。

本稿では「流し込む」という言葉で、「聞き手の意向を顧慮せず、話し手の意向を一方的に聞き手に通達する、あるいは押しつけるような態度」を表すことにする。「命令」の行為そのものではなく、「命令」の伝え方を表していることを明示するための表現である。前掲の例文で説明しよう。

(42) 明日は必ず行き｛φ／ヤ／ナ｝。（＝27）

話し手の意向である「命令」を表しているのは「明日は必ず行き」という連用形命令の部分であり、それをそのまま伝えているのがゼロ形式である。ヤやナはその意向を聞き手にどのように伝えるか、という、話し手の伝達態度を表している。ヤはその意向を、聞き手の意向を顧慮せず一方的に聞き手に流し込むという態度で伝え、ナは一致・同意を求めるという態度で伝える。

たとえば、親しい友人がけがをし、痛みがひどいのに病院に行かなかったという話を聞いて、次のように言ったとしよう。

(43) 明日は必ず病院に行きヤ。

ここではヤで、「明日は必ず病院に行け」という命令の意向を聞き手に一方的に押しつけている。しかし、同じ状況でも、相手の意向を顧慮して発話する場合には（44）のように同意を求めるナが使われる。

（44）もしその気になったら病院に行きナ。

ヤが「話し手の意向を一方的に聞き手に流し込む」という意味をもっていることを裏付ける根拠として、ヤが《依頼》では使用できない、という点が指摘できる。シテは《命令》にも《依頼》にも使用されるが（表１参照）、（45）のように《命令》で使用される場合にはヤが後接するのに対して、（46）のように《依頼》で使用される場合にはヤは使用できないのである。

（45）（バイト学生に）ここ、掃除して｛φ／ヤ／ナ｝。
（46）頼むから私の代わりに東京へ行って｛φ／*ヤ／ナ｝。

このように《依頼》でヤが共起しないのは、《依頼》は相手の選択権を認める行為指示であり、それがヤの「聞き手の意向を顧慮せず一方的に伝える」という意味と衝突するためだと考えられる。このことからヤが話し手の意向（命令）を「聞き手に一方的に流し込む」という意味をもっていると考えていいと思われる。逆に、《依頼》で使用できるのはナである。ナはヤの対極として、聞き手の意向を聞き、聞き手の選択権を認めるものであることが分かる。

以上、ゼロ形式、およびヤとナの基本的意味をざっとみてきたが、以下では具体的な用例をとおしてさらに検討を加えることにする。

5. 2.　ゼロ形式と終助詞がついた形式の違い

ゼロ形式は文字通り、「命令」というモダリティをそのまま伝えるものである。したがって、その件について初めて命令をおこなうようないわばニュートラルな命令では、ゼロ形式の方が自然である。

（47）（子どもを叱るために）ちょっとここへ座り｛φ／#ヤ／#ナ｝。
（48）（親しい友人が遊びに来たので）あ、入り｛φ／#ヤ／#ナ｝。

また、緊急時の命令ではゼロ形式が用いられる。

（49）火事や！逃げろ｛φ／#ヤ｝！

最後通告として問答無用の命令をおこなうときもゼロ形式となる。

（50）（子どもに）つべこべ言わんとさっさとしー｛φ／#ヤ／*ナ｝。

ゼロ形式にヤやナが付加されると、その「命令」を聞き手にどう伝えるかという話し手の態度のあり方が示される。そして、その態度がどのようなものであれ、わざわざそれが表明されるということは、聞き手に対する何らかの配慮がおこなわれていることを意味する。このことは、ゼロ形式と比べてヤ・ナが今すぐ実行することを求めるのではない命令（非タイミング考慮命令）の場合に多く用いられる傾向となって表れる。

（51）（子どもに）ようおぼえとき｛φ／ヤ／ナ｝。
（52）（子どもに）しっかりがんばり｛φ／ヤ／ナ｝。
（53）（友人に）駅に着いたら、電話しー｛φ／ヤ／ナ｝。
（54）（子どもに）もしも何かあったら、大声で叫び｛φ／ヤ／ナ｝。

こうした例ではゼロ形式も可能だが、ヤがつく方が自然である。
以下の例で検討する。

（55）（電車にのる友人に）あ、電車来たで。走り｛φ／ヤ／ナ｝。

ゼロ形式では「電車がそこまで来ている。走れ！」という切羽詰まったニュアンスになるのに対し、ヤやナの場合はもう少し時間的余裕を残すニュアンスとなる。ゼロ形式が緊急的に「今すぐ」の実行を求めるのに対して（タイミング考慮）、ヤやナは聞き手への伝え方（伝達態度）を考慮するだけの時間的猶予があることを含意している（非タイミング考慮）ためであろう。したがって、非タイミング考慮を示す文ではヤやナの方が自然になるのである。
逆に、緊急時など「今すぐ」という切羽詰まった状況ではヤやナは使用できない。

（56）火事や！逃げろ｛φ／＃ヤ｝！（＝49）
（57）今頃こんなところで何しとる。今すぐ学校へ行き｛φ／＃ヤ／＃ナ｝！

こうした状況でヤやナを使うと悠長なニュアンスが生じる。（56）のような緊急時には伝え方を考慮している余地はなく、したがってゼロ形式で命令がそのまま伝えられるのである。同様の理由で（57）のように、「今すぐやれ」と問答無用に命じる場合にもやはりゼロ形式が用いられる。ゼロ形式とヤ・ナの違いはこうした点に典型的に表れる。
（57）のような問答無用の命令でなくとも、ゼロ形式とヤ・ナの違いは以下のような例でもみられる。微妙なニュアンスの違いだが、行動を起こしながらおこなう現場性の強い命令ではゼロ形式が自然であり、一方、非タイミング考慮の命令ではヤ･ナが自然である。

(58)（子どもに手紙を手渡しながら）これ、学校に持って行き｛φ／?ヤ／?ナ｝。
(59)（子どもに）お手紙書くから、明日の朝、学校へ持って行き｛?φ／ヤ／ナ｝。
(60)（風邪をひいた友人に薬を手渡しながら）はい、この薬、飲み｛φ／?ヤ／?ナ｝。
(61)（風邪をひいた家人に）これ、よう効くからご飯の後で飲み｛?φ／ヤ／ナ｝。

このようにゼロ形式は「今すぐやれ」というニュアンスを持ち、ヤ・ナはゼロ形式と比較すると若干の時間的余裕を含意しているのである。

5. 3. ヤとナの違い

ここでは、ヤ・ナが使用される典型的な用法をとおしてヤとナの基本的な意味の違いについて検討する。

ヤは命令形専用であり、その基本的な意味は、聞き手の意向を顧慮せず、一方的に話し手の意向を聞き手に流し込むものである、と考えられる。

一方、ナは3節でみたように行為指示以外の平叙文と共起する汎用の終助詞であり、その場合、次のように聞き手に対して合意や同意を求める機能がある。

(62) あそこの駅前にローソンがあったやん｛φ／*ヤ／ナ｝？
(63) 明日は休講や｛*φ／*ヤ／ナ｝？

また、間投詞のナは、同意を求める確認要求表現としてしばしば使用される。

(64) あんたも行くやろ？ナ？ナ？

このように、汎用の終助詞ナの意味は、相手に対して合意や同意を求めるものである。これは命令形に後接する場合でも同様である。

以下、用例をとおしてヤとナの具体的な用法の検討に入る。その際、大阪方言では、シかシテかという形式の違いや、下降か非下降かというイントネーションの違いが意味に関与しており、非常に複雑である。したがって、できるだけ条件を統一して比較するため、まず、5. 3. 1. で最も典型的な例として、シの非下降イントネーションの場合を取り上げ、その後、5. 3. 2. でシの下降イントネーション、5. 3. 2. でシテについて検討することにする。

5. 3. 1. シの非下降イントネーション

5. 2. で、ヤやナは若干の時間的猶予を含意していると述べたが、それはあくまでゼロ形式と比較すれば、ということであり、緊急時以外には「すぐやれ」という意味でもヤと

ナは使われている。ヤとナには次のように、促しや言い聞かせなどの用法がある。

(a) 促し：平板調

先行する状況に関して話し手がある認識や思いを持っていて、それを含意した上で聞き手に命令の実行を促すような場合、しばしばヤやナが用いられる。

(65)（風邪をこじらせた友人に薬を手渡しながら）はい、これ飲み｛φ／ヤ／ナ｝。

(60)(61) の例について述べたとおり、このような状況ではゼロ形式が普通だが、ここでヤが使われると、たとえば「薬が嫌いなんて言ってないで、ともかく今はこの薬を飲め」というような話し手の強い思いが含意される。ヤの「話し手の命令の意向を一方的に流し込む」という伝達態度によって、聞き手を気遣って実行を強く促すという思いが表されるのである。したがって、この用法のヤはしばしば《聞き手利益命令》で使われる（6. 2. で詳述）。

このとき、ナが使われると、「聞き手に同意を求める」という意味が加わり、そこから、薬を飲むよう、押しつけがましくなく促すというニュアンスが生じ、より丁寧になる。また、相手が我が子の場合には、意向を聞くようなニュアンスが我が子になじまないためヤが使用される。このように相手によってヤとナが使い分けられるという側面があり、この点については次節で詳しく述べる。

(b) 言い聞かせ・念押し：上昇調

非下降イントネーションの中でも、ヤやナだけが高くつく上昇調が使われることがある。上昇調には「相手の気持ちを聞く」という含意があり、一方《命令》は聞き手の選択権を認めないものであるから、本来、《命令》と上昇調は矛盾するものである。事実、セイ・セイヤが上昇調になることはない。また、シのゼロ形式が上昇調になることもない。

(66) 早よ行け｛*φ／*ヤ｝〔↑〕。
(67) 早よ行き｛*φ／ヤ／ナ｝〔↑〕。

しかし、シにヤやナが後接した場合には上昇調も可能であり、その場合、子どもや目下にやさしく言い聞かせたり念押ししたりするというニュアンスになる。

(68)（子どもの友達に）暗くなったから気ぃつけて帰り｛*φ／ヤ〔↑〕／ナ〔↑〕｝。
(69)（子どもに）さっさと宿題せんと明日、困るで。早よやり｛*φ／ヤ〔↑〕／?ナ〔↑〕｝。

ヤを用いると一方的に命令を流し込んではいるものの、上昇調で相手の意向への配慮も示され、命令の強さが和らげられて言い聞かせるというニュアンスとなる。また、ナが使

われると聞き手の同意を求めて念押しするというニュアンスになり、上昇調とあいまって丁寧になる。したがって（69）のような場合には我が子に対してナは不自然となり、ヤが使われる。

次に矛盾考慮をあらわす下降イントネーションの場合をみる。

5. 3. 2.　シの下降イントネーション

一度おこなった命令が実行されないなど話し手の意向に反するような行為を聞き手がおこない、再度命令するような場合、（矛盾考慮）下降イントネーションとなる。このときには必ずヤかナが後接し、ゼロ形式になることはない。

（70）①（子どもを叱るため呼ぶ）ちょっと、ここへ座り｛φ／＃ヤ／＃ナ｝〔→〕。
　　②（子どもを呼んだがなかなか来ないので）早よ座りー〔↓〕｛*φ／ヤ／ナ｝。
（71）①（友人が訪ねてきたので）あ、入り｛φ／＃ヤ／＃ナ｝〔→〕。
　　②（ぐずぐずしているので）外は寒いから早よ入りー〔↓〕｛*φ／ヤ／ナ｝。

（70）（71）のように①で命令が達成されない場合、②のように下降イントネーションとなり、ヤかナがつく。（70）②ではなぜすぐに来ないのかという非難が含意され、（71）②では「寒いから早く入ってこい」という強い勧めが含意される。このとき、ヤが一方的に命令の意向を流し込むのに対して、ナの方が押しつけ度が小さい。ともに一度おこなった「命令」が実行されなかったという事実を踏まえての表現であるが、ヤでは「今度こそ実行させる」という話し手の強い態度が一方的に伝えられ、ナでは聞き手に同意を求める意味が付加されて説得するニュアンスとなる。また、非下降イントネーションの場合と異なり、下降イントネーションには相手の意向を聞くというニュアンスはないため、我が子にもナが使用できる。

（72）（子どもに）また人参残してる。残さんと全部食べー〔↓〕｛*φ／ヤ／ナ｝。

ちなみに、これでもなお命令が達成されない場合、最後通告としての命令では前述のようにゼロ形式が使われる。

（73）（70）③早よ座り。

これまで、シについて述べてきたが、以下、シテが用いられた場合について検討する。

5. 3. 3. シテ

文機能に〈依頼〉をもつシテの場合は少し複雑である。シテは表１でみたようにウチの目下以外の人には《命令》でも使用されるが、《命令》で使用された場合にはヤもナも後接する。その場合、これまでに述べたシの例に準ずる。

(74)（店長がバイト学生に）玄関、掃除して｛φ／ヤ／ナ｝。
(75)（友人に）駅に着いたら電話して｛φ／ヤ／ナ｝。
(76)（店長がバイトに）TVが撮影にくるからきれいにして｛*φ／ヤ〔↑〕／ナ〔↑〕｝。
(77)（店長がバイトに）まだしてないんか。さっさとしてー〔↓〕｛*φ／ヤ／ナ｝。
(78)（友人に）貸したノート、明日、必ず返して｛φ／ヤ／ナ｝。

ヤは一方的な命令のニュアンスになるのに対して、ナは聞き手に同意をもとめる意味となり、丁寧になる。(78) のような例でナが使われると、シテの文機能である〈依頼〉とあいまって《命令》とも《依頼》ともいえない行為指示になる。この点については次節で述べる。

しかし、シテが《依頼》で使用された時には前述したようにヤは使えない。

(79)（明日の会合に急用で行けなくなったため、親しい友人に）頼むから私の代わりに行って｛φ／*ヤ／ナ｝。
(80)〈明日、引っ越しをするが手が足りない〉頼むから来て｛φ／*ヤ／ナ｝。

ヤの「話し手の意向を一方的に流しこむ」という意味が、「聞き手の選択権を認める」という《依頼》の発話機能と矛盾するためであろう。このように《依頼》の行為指示ではヤは共起できないが、ナは共起できる。むしろ《依頼》の用法がナの典型的用法といえる。以上、見てきたように、シ、シテいずれの形式でも《命令》機能で発話される限りヤが後接し、その場合のヤの基本的な意味は、話し手の意向を聞き手に一方的に流し込むものであると考えられる。また、《命令》でも《依頼》でもナは後接し、ナの基本的な意味は「話し手の意向への一致・同意を聞き手に求めるものであると考えられる。

5. 4. まとめ

ヤとナの基本的な意味と用法についてまとめる。

(a) ゼロ形式は「命令」をそのまま伝えるものである。ニュートラルな軽い命令や問答無用の強い命令、緊急事態での命令で使用される。
(b) ヤの基本的な意味は、聞き手の意向を顧慮せず、話し手の意向（命令）を一方的に

聞き手に流し込むことをマークするものである。具体的には、促し、非タイミング考慮、念押しや言い聞かせ、矛盾考慮などの用法がある。

(c) ヤはその基本的な意味から、シでもシテでも《命令》で使用される場合には後接するが、シテが《依頼》で用いられた場合には後接できない。

(d) ナの基本的な意味は、話し手の意向に対して聞き手に一致・同意を求めることをマークするものである。ヤと同じような用法があるが、ナの基本的意味から、ヤより丁寧である。

このように、ヤとナは対極的な意味を持っているにもかかわらず、実際の運用場面では両者が同様に用いられ、置き換え可能な場合も多い。さらに、5. 4. で言及したように、ヤとナが聞き手によって使い分けられている、という状況もみられる。次節ではヤとナの使い分けに注目してその談話的な機能を探っていくことにする。

6．ヤとナの具体的な運用

本節では具体的な運用場面に注目し、ヤとナがどのように使い分けられているか、という観点からヤ・ナの異同をみていくことにする。5節でみたとおりシテでは発話機能によってヤとナの接続関係が異なるため、本節では発話機能別にみていくことにする。

分析に入る前に、発話機能別にシ・シテとヤ・ナの接続関係、およびイントネーションの関係を整理しておく（牧野2008）。表3で明らかなように、下降調ではゼロ形式はなく、かならずヤかナがつく。また、《依頼》ではシは使用されない。

以下、6. 1. で《非聞き手利益命令》、6. 2. で《聞き手利益命令》、6. 3. で比較のためシ

表3　発話機能をカバーする形式　及びヤとナの接続関係

発話機能	形式	非下降			下降調		
		φ	ヤ	ナ	φ	ヤ	ナ
《非聞き手利益命令》	シ	○	○	△	−	○	△
	シテ	○	○	○	−	○	○
《聞き手利益命令》	シ	○	○	△	−	○	○
	シテ	○	○	○	−	○	○
《依頼》	シ	−	−	−	−	−	−
	シテ	○	△	○	−	○	○
《勧め》	シ	○	○	△	−	○	○
	シテ	○	○	○	−	○	○

○: 使用可、△: 状況によって使用可、−: 当該形式を不使用

テが《依頼》で使用された場合についてみたのち、6. 4. でまとめる。

6. 1. 《非聞き手利益命令》

朝、子どもを起こすという状況を考えてみる。典型的な談話の流れは次のとおりである。

(81) ①（子どもに）8時やで。そろそろ起き ｛φ／ヤ／ #ナ｝〔→〕。
②（再度、声をかける）もう8時やで。早よ起き ｛*φ／ヤ／ #ナ｝〔↑〕
③（何回言っても起きないので）早よ起きー〔↓〕｛*φ／ヤ／ ?ナ｝。
④（業を煮やして）早よ起き！

第1発話として軽く声をかけるときは通常、ゼロ形式が用いられる。ヤが平板調で後接したり、上昇調でやさしく言い聞かせる場合もある。我が子に対して使われるのは主にヤであり、通常、ナは使わない。何回、起こしても起きない時は下降調になり、このときも我が子にはヤが使われる。それでも起きないと、ゼロ形式で問答無用の命令となる。

我が子にはナを使わない、という点について、インフォーマントは「ナを我が子に使うと、親が子どもに頼んでいるようでおかしい」という内省をしている。ナは「相手の同意を求める」という基本的意味を持つため、ナを使うと聞き手に選択権を認めるという含意が生じ、発話機能が《依頼》寄りになる。我が子に起きるよう頼むことは運用上、不適切である、ということであろう。したがって、依頼することがおかしくない相手にはナが使用できる。事実、同様の文脈でも起こす相手がよその子であればナを使っても差支えない。

(82) ①（お泊り保育の子どもたちに）みんな、そろそろ起き ｛φ／ヤ／ナ｝〔→〕。
②（再度、声をかける）もう8時やで。早よ起き ｛*φ／ヤ／ナ｝〔↑〕

このように、ヤとナは相手によって使い分けられることが分かる。

さらに、配慮が必要なおとなを相手に《非聞き手利益命令》をおこなう場合を考えてみる。(83) は店長がバイト学生に命じる場面である。

(83) ①ちょっと郵便局に行ってきて。
②もうすぐ4時になるから今すぐ行って ｛φ／ヤ／ナ｝。

こうした状況では通常はシテが使われるが、②の場合、ゼロ形式もヤもナも使える。ゼロ形式は話し手が特別な思いを含まず軽く声掛ける場合か、あるいは「今すぐ行け」という問答無用の命令の場合である。ヤが使用されると、その基本的意味が聞き手の意向を一方的に流し込むものであるため、聞き手に配慮しつつも「(忙しいだろうけれど) すぐ行け」

と《命令》の実行を促すニュアンスとなる。一方、ナが使われると「相手の同意を得る」という基本的意味から《依頼》のニュアンスが加味され、「(忙しいだろうけれど) 今すぐ行ってくれ」という丁寧な表現となる。

こうしたニュアンスの違いは発話機能の分類を示した図1 (3. 1.) で考えると分かりやすい。図2は図1を元に、ヤやナが後接した場合の発話機能の移動を図示したものである。3. 1. で「発話機能は連続的である」と述べたが、ここではその連続性に注目し、X軸で聞き手の選択権の度合いを、Y軸で非聞き手利益・聞き手利益の度合いを示している。

図2のとおり、シテは《非聞き手利益命令》機能で用いられているが、これにヤが加わると、「相手の意向に顧慮せず、命令の意向を一方的に流し込む」というヤの基本的意味によって選択権がマイナス方向に移動し、発話機能がより《命令》寄りになる。一方、ナが加わると、ナの「聞き手の同意を求める」という基本的意味によって選択権がプラスの方向に移動し、発話機能が《依頼》寄りになる、と考えられる。その結果、ナが後接した「シテナ」という形式は《命令》と《依頼》の境界に近くなり、《命令》とも《依頼》ともいえない行為指示となる。《依頼》か《命令》か、どちらともいえない行為指示というのは、実際の運用場面では《命令》であることをあいまいにするストラテジーであると思われる。

同じ状況で、店長がより命令的に発話しようとする場合にはシを使うことも可能である。

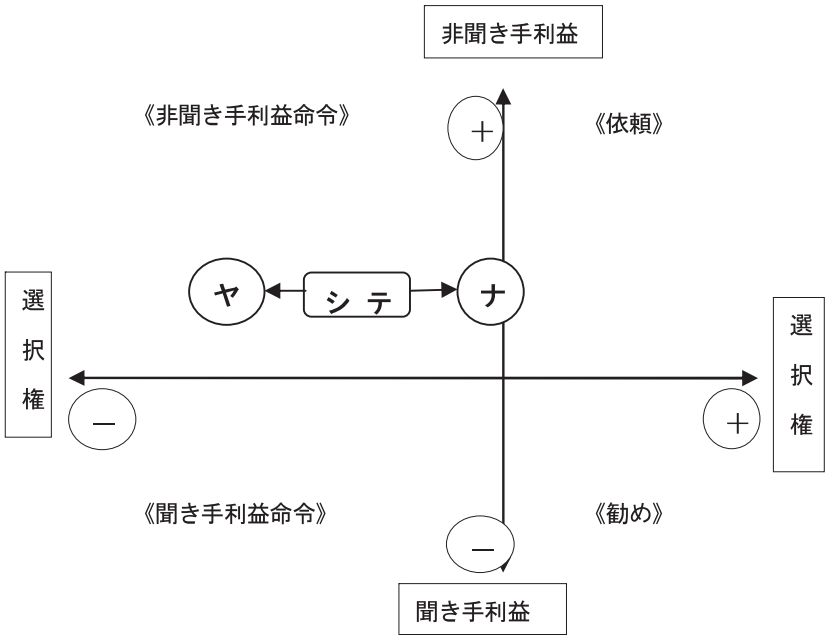

図2　シテヤとシテナの発話機能

(84) ①ちょっと郵便局に行ってきて。
②もうすぐ4時になるから今すぐ行き {φ／ヤ／ナ}。

(84) ②の場合を図3で考える。ヤあるいはナが後接した時の選択権の移動はシテの場合と同様である。しかし、シの文機能が〈命令〉であることから、そもそも《命令》寄りに位置しているため、ナが後接してもシナは《依頼》領域まではいかない。

このように、ヤとナはそれぞれの基本的意味によって発話機能の微調整を行っていると考えられる。では、発話機能を《依頼》寄りにするということは何を意味するのだろうか。Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論によれば、《命令》は相手の行動を一方的に拘束する行為であり、「人から拘束されたくない」という聞き手のネガティブフェイスを侵害するためフェイス侵害行為の最たるものであるが、《依頼》は相手の選択権を認めるため、その拘束が避けられ、《命令》と比較すればよりポライト（丁寧）であるといえる。すなわちナは発話機能を《依頼》寄りにすることで、聞き手のネガティブフェイスに配慮したネガティブポライトネスストラテジーとして機能しているといえる。一方、ヤは発話を《命令》寄りにすることで、行為指示という目的達成に寄与しているといえる。ただし、聞き手に全く顧慮しないゼロ形式とは異なり、5節で指摘したとおりヤもまた聞き手に配慮した表現ではある。このように、対人配慮が不可欠な命令では、ヤとナを使い

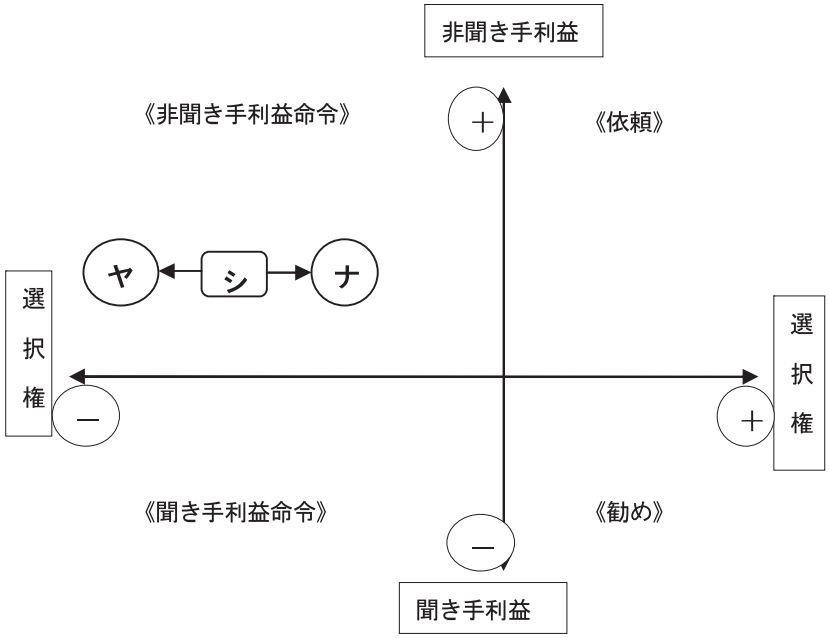

図3　シヤとシナの発話機能

分けることにより、対人配慮をおこないつつ命令の実行を志向しているといえる。

この点では下降調の場合も同様である。

(85) ①（店員に）店の前、掃いといて｛φ／ヤ／ナ｝〔→〕。
　　②（まだしていないのを見て）さっさとしてー｛*φ／ヤ／ナ｝〔↓〕。

店員を叱る場合などはヤが使われ、やさしく命じる場合や社会的距離が遠い場合はナが使用され、ヤとナが社会的距離や命令意図の強さによって使い分けられる。

非タイミング考慮の命令の場合もまた同様である。

(86)（子どもに）もしも何かあったら、大声で叫び｛φ／ヤ／ナ｝。
(87)（部下に）2時になったら、銀行に行って｛φ／ヤ／ナ｝。
(88)（友人に）駅に着いたら、電話しー｛φ／ヤ／ナ｝。
(89) ①雨が降ったら、洗濯物取り入れて。
　　②雨が降ったら、洗濯物取り入れてヤ。
　　③雨が降ったら、洗濯物取り入れてナ。

(89) ①のゼロ形式はニュートラルに軽く指示している意味となるが、②のようにヤが用いられると、「命令」の意図が強く示される。さらに、先行する状況に関する何らかの認識が含意されるため、「この前、頼んでいたのにやってくれなかったでしょ、今度こそちゃんとやってよ」というような言外の意味が加わる。また、③のようにナが用いられると《依頼》のニュアンスが強くなり、社会的距離が離れるに従って、ナが使用される場合が多くなる。

このように、ヤとナはその基本的意味によって発話機能の微調整をおこなうことができ、聞き手との社会的距離や状況に応じてその機能を使い分けることで、対人配慮をおこないつつ命令の達成を志向していると思われる。

6. 2. 《聞き手利益命令》

同じ命令でも《聞き手利益命令》の場合には若干、状況が異なる。

(90)（子どもに）気ぃつけて行き｛φ／ヤ／?ナ｝。
(91)（家に来ていた娘の友達に）気ぃつけて帰り｛φ／ヤ／ナ｝。
(92)（友人に）ちゃんと薬、飲み｛φ／ヤ／ナ｝。
(93)（風邪をひいた友人に）仕事のことは忘れて今日は寝ー｛φ／ヤ／ナ｝。

上記の例のような《聞き手利益命令》の場合には、シが使われることが多く、さらにヤが後接することが多い。ヤが後接すると「（あなたのためを思って）命令するのだ」という話し手の意図が示される。ナも使えるが、「ナはよそいきな感じがするため、わが子や親友など親しい間柄ではヤを使うことが多い」とインフォーマントは内省している。図4でみてみよう。ヤは発話機能を《命令》寄りにし、ナは《依頼》寄りにする。

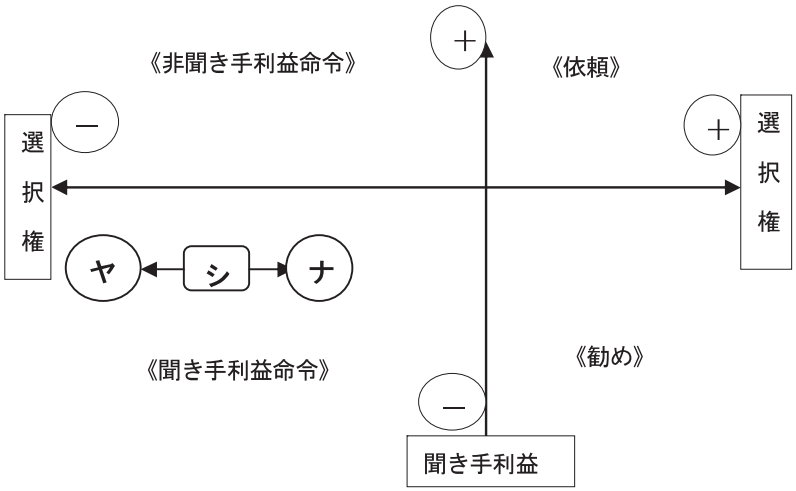

図4 《聞き手利益》でのシヤとシナの発話機能

《聞き手利益命令》において「シヤ」が多用されるのは、Leech（1983）が丁寧さの原則で「他者に利益を与えそうな所信の表出を最大限にせよ」と述べているとおり、相手にとって利益のある行為指示は、強く勧めた方がより丁寧である、という原理が働くためであり、「シヤ」の使用が可能な間柄である限り、強い表現がとられる、ということであろう。これはまたBrown and Levinson（1987）の言うポジティブポライトネスストラテジーでもある。すなわち、命令形などぞんざいな表現をあえて使うことで聞き手との距離を縮めて一体感を強め、そのことで聞き手への配慮を示すものである。

逆に、少し距離がある関係ではナを使う。ナで聞き手の選択権が含意され、選択権プラスの方に移動し、発話機能が《勧め》寄りになるため、ネガティブポライトネスストラテジーとしての丁寧さが表現できるのである。

矛盾考慮の場合も同様である。

（94）会合で、友人が、用事があって早く帰らなければならないのに、遠慮してぐずぐずしている。

1A：ここはいいから、もう帰り〔→〕。

2B：だけど、まだ片づけが終わっていないし…。（なかなか帰らない）

3A：ここはもういいから、早よ帰りー〔↓〕｛*φ／ヤ／ナ｝。

（95）友人とレストランに入り、友人はお酒を飲みたいと思っている、しかし、車で来たのでお酒が飲めない話し手に遠慮して飲むのを迷っている。

1A：遠慮せんとドンドン飲み。〔→〕

2B：だけど…。（遠慮している）

3A：かまへんから飲みー〔↓〕｛*φ／ヤ／ナ｝。

（94）ではAがBの背中を押して送り出す感じであり、（95）では「本当になんとも思ってないから遠慮せず飲みなさいよ」という気持ちでシが使用されている。ここには苛立ちのニュアンスはない。ヤもナも使えるが、ヤが使われると選択権がマイナスの方向に移動して発話機能が《命令》寄りになり、ナが使われると選択権がプラス方向に移動して《勧め》寄りになる。ヤで強く命令する方が相手への配慮を表すことになるため、親しい友人にはヤが使われるが、社会的距離のある人にはナが使われる。

ここで、「シテヤ」と「シーナ」の違いについて考えてみる。図２、３、４から、シにナが後接して《依頼》寄りになる場合と、シテにヤが後接して《命令》寄りになる場合とでは、発話機能の位置が近づくように見える。しかし、実際の使い方は若干異なる。「シテヤ」の場合、ヤが《依頼》には後接しないことから、シテが《命令》として発話されていることを明示する機能がある。またヤは、《命令》の機能がすでにある程度焼き付いているシテをさらに《命令》寄りに強化するものである。したがって、「シテヤ」は、シが使いにくい社会的関係の人に対する《命令》としてしばしば使用される。特に、《聞き手利益命令》の際のポジティブポライトネスストラテジーとして使われる。

（96）（イベント終了後、友人に）今日はゆっくり寝てヤ。

一方、「シーナ」は、シという《命令》の発話機能をナで《依頼》寄りにして《命令》機能を和らげるものであり、親しい人に対する《非聞き手利益命令》を和らげるネガティブポライトネスストラテジーとして用いられることが多い。

（97）（友人に）さっさとしーナ。

6. 3. 《依頼》

参考までに《依頼》の場合をみる。3. 2. でみたように、《依頼》では、シテしか使用できず、

その場合にはヤは後接できない。しかし、以下のような依頼場面では「シテヤ」が用いられる場合がある。

(98) 引っ越しするために友人に手を貸してくれるよう頼む。
1A：明日、引っ越しやねん。手伝いに来てくれへん?
2B：ええよ。
3A：ほな、10時に来て ｛φ／ #ヤ／ナ｝〔↑〕。
4B：分かった。
5A：ほんまに来て ｛#φ／ヤ／ナ｝〔↑〕。

他人に依頼する場合、第１発話でシテが用いられることは少なく、まず1Aのように、間接的な依頼表現が使われる。シテがしばしば《命令》で使用されるため、第１発話でシテが使用されると《命令》として聞かれる可能性があるためである。しかし、いったん、了解を得た後では、3Aのようにシテが使われる。この発話機能は《依頼》であり、ナが上昇調で後接する。このとき、ヤが用いられると、その基本的意味機能から、「必ず来いよ」という《非聞き手利益命令》として機能してしまい、「ひょっとしたらBが来ないかもしれない」というAの疑念を含意してしまう。しかし、5Aではそれまでのやり取りを踏まえた上で、確実な実行を促す意味でヤを使うことが可能になる。これは、ヤの付加によって、発話機能を《依頼》と《命令》の境界におき、その区別をあいまいにすることで、丁寧かつ強力に行為の実行を求める用法といえる。

また、次の例のように、一度おこなった《依頼》が達成されず、再度強く《依頼》する矛盾考慮の場合も、ヤとナがどちらも使える場合がある。

(99) 親しい友人に車を貸してくれるよう頼む。
1A：明日の日曜日、車を貸してくれへん?
2B：新車やからねえ・・。(迷っている)
3A：頼むから貸してー ｛*φ／ヤ／ナ｝〔↓〕。

3Aの例のような極めて受諾しにくい《依頼》に対し、ヤは強く実行を迫るのに対し、ナは強く頼みこむ懇願のニュアンスとなる。前者は《非聞き手利益命令》寄り、後者は強引に同意を求める《依頼》であり、微妙なニュアンスの違いを表現していると思われる。

6. 4. まとめ

以上、ヤとナが談話の中でいかに使い分けられているか、その際、ヤとナの基本的意味

がどのように用いられ、どのようなニュアンスの違いが生じるかをみた。ヤとナの談話的な機能について以下のようにまとめられる。

(a) ヤは「話し手の意向〈命令〉を聞き手に一方的に流しこむ」という基本的な意味から、発話機能を《命令》寄りに移動し、ナは「聞き手に同意を求める」という基本的意味から発話機能を《依頼》《勧め》寄りに移動する。このようにヤとナはその基本的意味から発話機能を微調整する、という談話的な機能を持つと考えられる。

(b) ナは《非聞き手利益命令》を《依頼》寄りにすることでネガティブポライトネスストラテジーとして機能する。

(c)《聞き手利益命令》ではヤは発話機能を《命令》寄りにすることで、丁寧さの原理によりポジティブポライトネスストラテジーとして機能し、ナは発話機能を《勧め》寄りにすることでネガティブポライトネスストラテジーとして機能する。

(d) 実際の運用場面では、相手や状況によってヤとナを使い分け、発話機能の微調整をおこなうことで、聞き手に配慮しつつ行為指示の達成を志向している。

7．おわりに

本稿では、「大阪方言の命令形」に後接する終助詞ヤとナの基本的意味について記述し、その運用についての談話的な機能の分析をおこなった。その結果、以下のことを指摘した。

(a) ヤは「大阪方言の命令形」にのみ後接する命令形専用の終助詞である。ナは汎用の終助詞であり、連用形命令とテ形命令には後接するが、命令形命令には後接しない。（4節）

(b) ゼロ形式の基本的な意味は「命令」をそのまま伝えるものであり、ニュートラルな命令、緊急時や問答無用の命令で使用される。

ヤの基本的な意味は、話し手の意向（命令）を、聞き手の意向を顧慮せず一方的に聞き手に流し込む態度を表わすものである。

ナの基本的な意味は、話し手の意向に対して聞き手に一致・同意を求める態度を表わすものである。（5節）

(c) 実際の運用場面では、それぞれの基本的意味から、ヤは《命令》寄りに、ナは《依頼》や《勧め》寄りに発話機能の微調整をおこなうという談話的な機能をもつ。（6節）

(d) ナが使用された時はネガティブポライトネスストラテジーによる丁寧な表現として相手への配慮が表現される。《聞き手利益命令》でヤが使用された時は、丁寧さの原理やポジティブポライトネスストラテジーとして相手への配慮が表現される。（6節）

(e) 話し手は相手や状況によりヤとナを使い分け、発話機能を微調整することで、相手に配慮しつつ命令を達成することを志向している。(6節)

このように、大阪方言では終助詞のヤ・ナがその基本的意味によって、命令における対人配慮に大きく関与していることがわかった。他方言でも方言形命令形に後接する終助詞が発達しており、その様相にはそれぞれの方言の特徴が表れていると考えられる。共通語や各方言の終助詞の対照をおこなうことで、終助詞のよりダイナミックな機能が明らかになる、と思われる。

注

1)「大阪方言の命令形」の形式は以下のとおりである。

表4　大阪方言の命令形の3形式

		命令形命令	連用形命令	テ形命令
五段動詞	行く	イケ	イキ	イッテ
上一段動詞	見る	ミイ（ミー）	ミ	ミテ
	起きる	オキイ（オキー）	オキ	オキテ
下一段動詞	寝る	ネイ（ネー）	ネ	ネテ
	食べる	タベイ（タベー）	タベ	タベテ
サ変動詞	する	セイ（セー）	シ	シテ
カ変動詞	くる	コイ	キ	キテ

表4でわかるように、一段動詞では、命令形命令と連用形命令の形式が似ており、特に2音節動詞では連用形命令がしばしば長音化するため、非常に紛らわしい。しかし、島田（1944）は、2つの命令形はアクセントの相違によって混乱が回避されている、と説明している。すなわち、連用形命令では京阪アクセントの式の保存がされているのに対して、命令形命令はすべて「下降型」になるためである。

（例）見る：連用形命令：ミー（HH)、命令形命令　ミー（HL）

2）大阪方言の動詞のアクセントは「低起無核」と「高起無核」の2種類あり、連用形命令やテ形命令に終助詞ナやヤがついても、基本的には「動詞＋終助詞」全体が動詞単独と同じアクセントパターンになると考えられる（順接)。たとえば、次のとおりである。

・低起無核動詞の場合:「起きる（LLH)」の連用形命令は「起き（LH）であり、これにヤがつくと、「起きヤ（LLH)」となり、一見すると上昇しているように聞こえる。

・高起無核動詞の場合:「走る（HHH)」の連用形命令は「走り（HHH）であり、これにヤがつくと、「走りヤ（HHHH)」となり、平板に聞こえる。

3）表2は本稿と同じインフォーマントに、セイ、シ、シテの使用範囲を尋ねた結果をまとめたものである。また、表3は、男性の運用について、以下のインフォーマントに内省を聞いたものである。

1965（昭和40）年生まれ、男性、0-7：豊中市、7-9：兵庫県尼崎市、9-11：名古屋市、11-13：金沢市、13-17：豊中市、17～：大阪市。

4）ちなみに、東京方言には次のような命令表現もある。

（100）早く行きナ　{φ／ヨ}。

形式上は、大阪方言と同じだが、東京方言には連用形命令がなく、連用形命令に終助詞ナがついたものとは考えにくい。島田（1994）が指摘しているとおり、「行きな（さい）」の後部が脱落したものと考えられる。

5）共通語のヨ・ネの意味機能については多くの研究がおこなわれている。金水・田窪（1998）は、ヨの基本的意味を「情報Ｉ－領域に記載せよ、という指示である」とし、命令、依頼で用いられるヨは、命令の行為そのものではなく命令内容の記載を指示しているものである、と指摘している。しかし、大阪方言のヤ、ナの場合はヨ、ネと異なる点も多く、共通語との比較は今後の課題である。

参考文献

井上優（1993）「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」―命令文・依頼文を例に―」『国立国語研究所報告105　研究報告書14』

―――（1995）「富山県砺波方言の「命令形＋カ」『日本語研究』15、東京都立大学国語学研究室

―――（2006）「モダリティ」佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂　シリーズ方言学２『方言の文法』岩波書店

柏崎雅代（1993）『日本語における行為指示表現の機能―「お～／～てください」「～てくれ」「～て」およびその疑問・否定疑問形について―』日本語教育基礎研究シリーズ１　くろしお出版

金水敏・田窪行則（1998）「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」堂下修司・田中穂積・新美康永・溝口理一郎・白井克彦編『音声による人間と機械の対話』オーム社

熊取谷哲夫（1995）「発話行為理論から見た依頼表現―発話行為から談話行動へ―」『日本語学』14-11　明治書院

郡史郎（1997）『大阪府のことば』日本のことばシリーズ27　明治書院

渋谷勝己（2003）「山形市方言における命令形後接の文末詞ナ・ネ・ヨ」『阪大社会言語学研究ノート』5　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

島田勇雄（1944）「大阪方言の命令法」『方言研究』10　井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編（1996）『日本列島方言叢書⑯－近畿方言考④大阪府・奈良県』ゆまに書房

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

姫野伴子（1997）「行為指示型発話行為の機能と形式」『埼玉大学紀要〔教養学部〕』33-1

牧野由紀子（2008）「大阪方言における命令形の使用範囲―セイ・シ・シテをめぐって―」『阪大社会言語学研究ノート』8　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

森山卓郎（1999）「命令表現とそのイントネーション―京都市方言を中心に―」音声文法研究会編『文法と音声Ⅱ』くろしお出版

Leech,N. Geoffrey（1983）*Principles of Pragmatics*: London :Longman:　ジェフリー・N.リーチ　池上嘉彦　川上誓作訳（2000）『語用論』紀伊国屋書店

Brown, Penelope and Levinson, Stephen C.（1987）*Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

謝辞

本稿を執筆するにあたって、佐竹久仁子氏には重要な指摘をいくつもいただきました。また、日本語学研究室の皆さまにも有益なコメントをたくさんいただきました。インフォーマントのお二人にはお忙しい中、何度も内省を聞かせていただきました。ここに記して感謝申し上げます。

（博士後期課程学生）

（2008年 8 月22日受付）
（2008年10月 2 日修正版受付）
（2008年10月17日掲載決定）